

I 今年度の取組と自己評価

1 教育活動への取組と自己評価

(1) 学習活動

今年度の取組目標	自己評価
<p>①進学指導重点校として、すべての生徒に大学進学に向けての基礎学力定着を図る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・高校入試の分析を行うことで、過去の入学生との差異を調査した。入学段階で基礎学力の定着が不十分な生徒がいるので、早期に高校の学習に移行できるようにする。 ・1・2学年では、全ての科目で、基礎的な学力に基づく知識と技能を身に付けさせ、3学年では発展的な学習を通じて思考力、判断力、表現力を高めることができた。 ・習熟度別授業と少人数授業により、生徒に身に付けさせたい個々の学力課題にあったきめ細かい指導を行った。 ・年4回の定期考査ごとに成績を出すことで生徒に学習到達度を振り返らせることができた。必要に応じ、補習や個別指導を実施した
<p>②生徒の学習意欲を向上させるため、授業内容・方法を工夫する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・独自教材を授業に用いることで、生徒の学習意欲向上、難関国立大学合格に必要な学力、そして高校卒業後にも通じる高い教養を身に付けさせることができた。 ・地歴公民、理科礎等の授業では、年間を通じての課題研究活動を行った。生徒間の対話や学び合いを重視した授業を、多くの教科で展開した。総合的な探究の時間において、課題発見・解決型の活動を通じ、将来の研究活動にも繋がる探究活動が実施できた。探究型の学びが点の活動で終わらないよう、継続発展していく取組が必要である。 ・各教科・科目から出される課題の量や学習のタイミングに関しては教科間の情報交換が必要であった。 ・学校図書館の授業での活用や、蔵書の充実により生徒の読書活動が活性化した。授業との連携を充実させ、低学年からの図書館利用の拡大を進めていく。 ・答えは与えるものでなく、自分で考えだすもの、という意識を生徒に持たせ、共通課題による共通指導を行い、学習内容の均質化を行った。 ・「自分の言葉で事象を表現する」ことを対話を通じて身に付けさせる授業展開を行った。 ・年間11回の図書選定委員会による選書活動、ビブリオバトルへの参加等を通じて図書活動を促進した。 ・アクティブラーニングが、形式的なものにならないように、教員間での情報交換研修を継続させていく。
<p>③生徒の学習時間を確保し、進学実績の向上を図る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・6月と11月に進路意識調査を行い、進路希望や学習時間やスマホ利用時間など生徒の実態を把握した。その結果をキャリアガイダンスなどで生徒にフィードバックし問題意識を持たせた。 ・到達度テストを導入し、新入生に学習ペースを構築した。 ・予習復習の学習サイクルを完成させ、各教科で共通の課題、小テスト

	<p>への取組が行える体制をつくった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・定期考査前の部活動の在り方については、定期考査前に部長会を開催して周知徹底を図った。各部が学業とのバランスも図りながら、計画的に活動を行っていた。年間、月間の活動計画を立案する際に、各団体の所属生徒自身が、活動の意義、目的について主体的に捉えて考察し、適切な活動計画を構築できる環境作りを検討する。 ・自主学习支援事業をはじめとする外部組織からの自習活動支援、教科による自習支援等により、講義室、特別教室、図書館での自学自習を行う機会を提供し、自習室の利用延長と休日の開放を行った。 ・進路意識調査の結果を分析し課題解決に取り組むためにきめ細かい指導が必要である。 ・新学習指導要領の導入や一人1台端末の導入で学習形態が変わっており、生徒に課す課題のバランスが必要である。
④組織として教員の授業力向上に努め、教科指導の充実を図る。	<ul style="list-style-type: none"> ・教科会で、個々の生徒の学習状況についての情報共有を行った。 ・教科年間指導計画を新課程に応じて新規作成することができた。 ・毎月教科会を定例で実施し、計画的な指導の実施に取り組むことができた。模試分析会への参加率も上がり、教員の意識も向上した。 ・次年度に向け、基本となる教科の定期考査の統一が進んだ。 ・観点別評価の評価方法を全教科で共有することができた。今後は評価と評定の対応について、実態に応じたブラッシュアップが必要である。 ・指名制の授業研究への参加や若手教員育成道場に参加している教員の授業力向上、研究授業への参加、アドバイザーや主幹教諭・指導教諭からの指導により、組織としての授業力向上の仕組みが定着した。 ・生徒による授業評価は定着している。評価の一層の活用が課題である。
⑤東京都の教育施策を見据えて、新たな教育課題に取り組む。	<ul style="list-style-type: none"> ・理数研究校としての活動は、「科学の甲子園」等にも積極的に参加し、福島双葉の原子力災害伝承館訪問、夏季の大学の教員を招いての発生活過程の実験講習会など、理系・文系に限らず生徒の新たな経験値をつけることができた。理数研究個の活動が学校全体のものになっていない。一部の教員の負担が大きい。 ・英語教育研究推進校として、生徒の英語4技能向上の取組を推進した。検定結果の経年比較等、成果の検証に繋げることが課題である。
⑥デジタル技術を活用した教育を推進する。	<ul style="list-style-type: none"> ・O365を利用し、各教科でデジタルコンテンツの作成から実践、改善までのサイクルに取り組んでいる。実践事例を共有する研修会を開催し、職員間でのスキルアップの機会を設けることができた。 ・生徒へのアンケート、学校からの情報発信等において、紙媒体からデジタルコンテンツの利用に向けた移行をさらに推し進めた。

(2) 進路指導

今年度の取組目標	自己評価
①1学年より3年間を見通した系統的、組織的な進路指導をきめ細かに行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・進路指導計画に基づき進路行事を実施し、将来の進路について深く考えさせた。保護者向け進路講話も開催した。1学年では3年間を見通した年間進路指導計画表を配付、説明した。ホームルームにおける「学年進路計画」の作成とその実施や進路指導に向けた面談をサポートし、きめ細かい組織的な進路指導の体制を整えることが必要である。 ・個人面談はおおむね年3回実施し、校内成績や模試成績推移、志望大

	<p>学などがわかる資料を利用し、希望者には三者面談も実施した。面談期間の明確化により、希望しやすい工夫をしていく。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1年生3回、2年生3回、3年生5回キャリアガイダンスを行った。 ・自己の将来考えさせるために1、2年生を対象に進路講演会を、1年生を対象に様々な職業に従事する卒業生による「進路懇談会」、2年生対象に大学生の卒業生による「進路懇談会」を実施し、進路意識を高めた。大学の内容を理解するために「東工大模擬授業」「一橋大模擬授業」「女子生徒のための東大説明会」「東大ガイダンス」「医学部ガイダンス」「医学部受験説明会」を実施した。 ・「京大見学ツアー」「東大見学会（2回）」「卒業生を励ます会」を実施した。 ・時機に応じた進路通信を発行し進路情報の提供に努めた。
<p>②学力向上のため、長期休業日中の講習の参加生徒の増加を目指す。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・4月には夏季講習計画を立案し、生徒に可能な限り早く提示している。夏季だけではなく、秋期講習、直前指導を含めた年間の教科指導計画を生徒に示し、計画的な学習に取り組ませる。 ・休業中の講習優先の意識は定着している。 ・夏季講習を9期にわたり実施し、参加率の低下で参加人数が減少した。 ・秋季冬季講習の講座数が減り、参加者数も減少した。
<p>③進学指導重点校として培ってきた学習指導・進路指導ノウハウをさらに発展させるとともに、進路データの蓄積を行い、諸会議での共有を通して教員の共通理解を図る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「進路の手引き」「学習の手引き」を作成し、進路意識の動機付けと学習意欲の向上に活用した。 ・年間の計画に従って各学年で模擬試験を実施した。 ・模試分析会を実施し、原則参加の意識が定着した。分析により生徒の学習状況を把握し、学習内容を確認しながら教科指導に反映させ、授業を進めるようになった。分析結果を基に進路通信を作り、学年集会や保護者会で情報提供、共有し、進路指導に活かした。模試分析会をさらに充実させて、教科指導、進路指導に反映させる必要がある。 ・「出願指導研究会」を3回実施し、生徒の状況を把握し進路情報の共有に努めた。6月に教員研修会を実施し、進学指導の意識づけに取り組んだ。担任を中心に出席校決定の方法について講習を行った。さらにきめ細かい進路指導や出願指導ができるように進路指導、出願指導のための教員研修を実施し、大学入試情報を共有し進路指導、出願指導に当たる必要がある。

(3) 生活指導

今年度の取組目標	自己評価
<p>①基本的な生活習慣の確立に向けた指導を重点的に行う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学年集会、進路通信、授業を通じて自己規律やタイムマネジメントの意識を高める指導を行った。生徒の意識の変容に伴い、指導計画の見直しや改善を毎年行う必要がある。また、集会等で教員が指導するだけでなく、生徒が中心となり行動を起こし呼びかけるような機会を増やす仕掛けづくりが必要である。 ・集会や部長会を通じて下校時間の厳守や下校マナーの遵守については再三指導をした。その直後は改善がみられる、時間が経つルーズになってしまう生徒も一部に見受けられ、苦情を頂くこともあった。今後も定期的に部長会を開催し、時間やマナーについて生徒自身に考えさせて習慣化させられるような指導を行っていく必要がある。

	<ul style="list-style-type: none"> 1年生を対象としたセーフティ教室でSNS等のルールについて講師の方からお話をいただき、生徒の危機感が高まった。
②生徒が安心して学校生活に取り組めるよう、質の高い教育環境を整える。	<ul style="list-style-type: none"> いじめ対策委員会、生徒支援委員会等を通じて、いじめと認定するような案件はなかった。ふれあい月間を通じて、いじめに関するアンケートを実施し、具体的な回答に応じては個別対応を行った。いじめにつながるような事例報告はなかった。今後も、生徒情報を共有し学年担任団で生徒を見て指導し、小さな事案でも組織的に迅速な対応をする。また定期的な面談、教科担任、部活顧問と担任との情報共有を進めるとともに、他者を尊重する意識や態度を育める指導を推進する。 登下校の状況に合わせて門扉の開閉を管理し、不審者の侵入への警戒を重視した。引き続き、危機管理の意識を職員全体で共有する。
③関係諸機関との連携や交流を通して、生徒の安全を守り、公共心を育てる取組みを実施する。	<ul style="list-style-type: none"> 交通安全教室や薬物乱用教室により、講話やビデオ視聴を通して自分の身は自分で守っていくことの大切さなど、生徒へ安全に対する意識を高めることができた。次年度、自転車運転時のヘルメット着用努力義務に伴った指導の在り方を検討する。 都内の高校の生徒会が自主的に運営する東京都中学高等学校生徒会懇談会への参加し交流を深めた。 生徒会が赤い羽根共同募金へ参加し、校内・国立駅で募金活動を行った。社会貢献意欲の向上につながった。 夏季に地域や関係機関と連携した防災教育を実施した。夏の講演について、暑熱対策が必要であった。 生徒の安全については、登下校、休日の過ごし方にも関わることでPTA・保護者と連携して取り組んでいく必要がある。

(4) 特別活動・部活動

今年度の取組目標	自己評価
①学校行事を通じて、国立高校生としての一体感と誇りを持たせ、学校生活を充実・発展させる。	<ul style="list-style-type: none"> クラス演劇については、生徒主体で進めることができた。国高祭実行委員会及び文化祭実行委員会生徒との頻繁な打ち合わせや進捗状況の確認を通して、連携を密におこなった。直前の急な変更の際は、確定した内容の教員への周知が後手に回ることがあった。 体育祭実行委員会の生徒たちとコミュニケーションを密に図りながら、1年間をかけて準備や計画を行ってきた。感染症対策と熱中症対策の両方に留意しながら行うという計画を実施できたことは評価できるが、早い段階で形態の変更等を提案するべきであった。 新入生歓迎会及び文化祭において、感染症対策や事故防止対策を生徒とも十分に協議、指導して、当日の見回り等も実施し、事故ゼロを実現した。特に文化祭では人数制限や換気を徹底し、感染発生やクラスターを防ぐことができた。生徒たちは事前に多くの話し合いを重ね、コロナウィルスの影響を多大に受けながらもその状況下で実施できる最善の策を考えていた。 学年の横のつながりと上級生及び下級生とのつながりを持たせながら主体性を持たせながら学校行事等の企画・運営に当たらせた。 クラス委員が中心になり、クラス討議、各委員係がクラスを率先する流れが確立した。室長や各委員がクラスを超えた学年内での横のつながりが学年全体を纏まりある集団に作り上げた。

	<ul style="list-style-type: none"> ・委員会生徒と密に連携を図り、生徒の意志や意見を尊重しながらも、学校行事としてのあるべき姿を求めた行事の準備、運営を推し進めていくことができた。委員会生徒と教員間で連携を図りながら、運営計画を立て、保護者・中学生来校の文化祭を開催することができた。 ・文化祭では、情報管理部、情報科の教員と協力し、HPを活用して来校者の抽選や、実際に来校する際のルールなどの周知ができた。 ・体育祭では、これまでになかった競技練習の時間を導入し、仲間とともに団体競技に積極的に取り組む態度を身に付けさせた。開催時期の天候・気温を考慮し、安全性を最優先した柔軟性のある対応を検討していく必要がある。 ・第九演奏会において感染症対策のための制約が大きい中、リハーサル・本番で希望者すべてがプロとの共演を果たした。貴重な文化活動の機会となり、生徒の芸術性を高める機会となった。 ・行事運営において感染症対策にも最大限注力したが、改めてコロナ禍での行事運営の難しさを生徒とともに痛感した。次年度はまた新たな開催形態を模索しなくてはならないと考えられるので、早い段階から生徒委員と連携を図り、ち密な計画を立てる。生徒同士の学年のつながりと上下学年とのつながりを強くもつとともに活動の在り方としては新型コロナウイルスの影響で縮小されたものとそれ以前のものを受け継ぎ精選して行っていく。特に、かつてのような規模の来校者を想定した、入念な準備が必要となるため、実行委員生徒へのサポートを検討していく。 ・もっと広く生徒一人一人が活動できるよう、生徒会活動の活性化を促す。
<p>②部活動を通じて、ルールを順守する態度を身に付けさせると共に、目標に向かって協力し、努力する態度を育成させる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・部活動勧誘や新入生オリエンテーションを工夫し、今年度は例年以上に高い部活動加入率を示した。 ・部長会を月に1回程度開催し、部長たちに様々な連絡をしながら、部活動を生徒主体の運営について指導した。その成果も見られた一方、顧問教員との連携がうまく図れていない部活もあった。部長を中心とした生徒側から顧問の先生と密に連携を図る習慣を身に付けていくことが望まれる。 ・部活動ごとに計画性をもった活動を行い、休養日の設定も確実に進めていた。顧問の側に部活動ガイドラインに則った活動を前提とする意識のさらなる徹底が必要である。 ・各団体が、活動の意義、目的、目標を明確にし、年間、月間等の活動計画の立案段階から、顧問、生徒、保護者の相互の理解、合意に基づいた活動を目指せることを理想とした活動運営を支えていく。 ・いじめや体罰については、適宜指導を行い、安心できる活動を行っている。 ・活動の積極的な発信を行っている部とそうでない部の差が大きく、今後の課題である。

(5) 安心安全と健康づくり

今年度の取組目標	自己評価
①快適な学習環境維持のために、校	・定期的な美化活動の定着が図られた。ごみの分別を丁寧に行い、資源

<p>内美化に努める。</p>	<p>物（紙類）も回収も定期的に行った。日常の清掃活動については、十分でない点もある。大掃除の在り方を検討する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ごみの分別、持ち帰りは徹底されている。行事等で出た資材の再利用も十分に達成されている。一方で、学校行事等が終わった後も、教室等に使用したり作成したりしたものが放置されたままであることがあり、行事等の意識の切り替えができない環境が見られるため、行事後の片付け、清掃を期限を決めて終えさせ、気持ちの切り替えを生徒自ら行えるような条件整備をする必要がある。
<p>②生徒の心身の健康に配慮した教育活動を行う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・4月から6月にかけて、定期健康診断および諸検査を行い、生徒の健康状況の把握にし、治療勧告書を保護者へ通知し事後措置に努めた。 ・6月に、スポーツトレーナーによる暑熱対策講習会を生徒向けに実施し、夏場の事故対策を行った。 ・避難訓練を定期的に行なった。 ・スクールカウンセラーとの連携はうまく行われている。今年度も生徒・保護者からの相談や教員との連携により、生徒支援に役立った。また、生徒理解研修の講師として、生徒指導に有意義な講演を実施した。 ・生徒支援委員会を毎月実施し、課題を抱える生徒の近況や経過を共有し、教員間の共通認識を図り、個々の生徒の多様な状況に、対応してきた。引き続き教員間の情報共有や、校内外の相談体制の充実、複数で対応する教員の役割分担を意識することも必要である。 ・生命尊重について、折に触れ指導するとともに、教員に対しても、常に注意喚起を行っている。 ・関係者が新型コロナウイルス感染症に罹患した際には、校内の接触状況、消毒状況の把握を迅速に行い、クラスターの発生やそれに伴う休校措置は一件も起こらなかった。また、感染に関する情報も速やかに発信することで、感染予防の意識づくりを行うこともできた。 ・今年度、精神科医派遣事業を運営し、保護者向け講演会をハイブリット開催し、多くの参加があり好評であった。 ・専門医を招いて、がん教育に関する講演会を1学年で実施した。 ・救急救命の対応のために教員の応急救護訓練を立川消防署（谷保）に依頼して実施した。

(6) 募集・広報活動

<p>今年度の取組目標</p>	<p>自 己 評 価</p>
<p>①スクールガイド及び学校紹介ビデオを早期に作成し、広報活動の充実を図る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・行事写真、説明資料などをできるだけ魅力的な新しいものと入れ換え、新課程に入った1年生の授業が、どのように行われているか、中学生に伝わるように最新情報を伝えるようにした。写真や資料を掲載するにあたり、生徒の承諾をえることが難しいケースもある。予め生徒の承諾を得る方法を検討することが必要である。 ・直接来校できない中学生向けに学校ホームページを通じて動画配信等を充実させ、制限下で来校できなかった中学生やその保護者向けにも広報に関する情報が行き渡るように取り組むことができた。
<p>②学校説明会や授業公開、ホームページを活用し、全教員が必ず募集広報活動に参画することで、本校</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・感染症対策に配慮しつつ、学校説明会3回、見学会11回、授業公開2回、小学生保護者対象説明会、入試結果報告会、自作作成問題説明会3回を実施した。感染症対応のため、参加人数を制限せざるを得ず、

<p>のよさを強くアピールする。</p>	<p>希望者全員を受け入れられなかった。1回の参加人数を増やすことを検討する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・来校できない中学生や保護者に向け、動画配信の実施で対応した。 ・学校説明会や見学会、授業公開等に生徒会や室長会の積極的な協力を得て、生徒を前面に出すなど、学校の良さをアピールできるようにした。受験生や保護者に学校生活について具体的なイメージをもってもらえた。生徒会や室長会には、次年度以降も協力を求めてゆく。 ・入試倍率について、制度の変更や周辺学校の新設学科の影響等、複合的な理由が考えられる。入学生徒アンケート調査の分析が必要である。 ・広報活動により多くの職員の協力が必要である。
<p>③進学重点校に相応しい入学選抜方法を検討する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・新学習指導要領が目指す施策に合致させるとともに、本校が求める生徒像に沿って、きめ細かな協議を行い、推薦選抜における小論文問題を決定した。各検査得点の分析が必要である。 ・本校の求める生徒に適した資質・能力を想定し、綿密な検討により、学力検査における自己作成問題を作成した。中学校における基礎学力の定着状況を測れる作問を心がけ、適切な学力把握ができる出題を実現した。得点率の低い設問や得点分布が偏る設問について、選抜試験としての効果検証が必要である。 ・組織的な選抜業務への対応、丁寧な繰り返しの点検により、誤りのない適切な入学者選抜を実施したが、インターネット出願や ESAT-J 等の導入に伴い、業務設計の全工程の見直しと改善が必要である。
<p>④地域の小・中学校との連携による相互の教育課題の共有と解決、地域住民との交流を図る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・コロナ禍のため、地域の小中学校や自治会等と連携して合同で行う行事はできなかった。長期休業中の国立市立中学校への学習支援など、生徒単位で参加した生徒もいた。 ・公開講座や施設開放は実施できた。 ・文化祭は中学3年生限定で、予約制で公開することができ、その素晴らしさを伝えることが出来た。個別相談で、中学3年生から「文化祭に感動し、国立高校を志望した」という声が多かった。国立高校の魅力としての文化祭をできる限り外部に公開していきたい。 ・防災訓練について、地域との交流の実施可能な方法を検討する。

(7) 学校運営・組織体制

今年度の取組目標	自己評価
<p>①校内組織を活性化し、より良い学校づくりを目指した取組を行うための協働体制を確立する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学校運営連絡協議会を3回、対面で実施し、学校の現状を委員の方々と共有することができた。学校評価アンケートについて、forms を導入したことで処理速度が上がり、分析を進める上でも効果があった。結果を学年会で共有し、生徒・保護者対応に活かした。無記名のため、多様な意見がみられるようになり、自由意見をどのように取り扱うかを検討する必要がある。 ・企画調整会議で周知した内容は学校運営の核として運営されている。分掌部会・学年会を中心に企画調整会議の情報伝達や学年内での課題について検討を行い組織的な運営を実施した。 ・分掌会議、学年会の議事録の共有化が進み、学校全体の業務進捗状況が把握しやすいようになった。 ・情報共有が不十分な場面もあったため、企画調整会議の内容を全教職

	<p>員が職員室フォルダ内で閲覧できるようにするなど、情報の共有化という観点で、連絡掲示板のようなサイトやフォルダを設置することを検討し、情報伝達をより適切に行う必要がある。校内組織の情報共有をデジタル化し、協働体制のスピードと再現性を向上していく</p>
<p>② ICTの活用や会議の効率的運用により校務を効率よく遂行することで、教職員のライフ・ワーク・バランスの推進を図る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・会議の内容や諸連絡などを Teams やメールでのやり取り、学年黒板等を活用して共有し、限定した時間での学年会を実施し効率化を図った。 ・会議の終了時刻を定める等、勤務時間を超えた業務が発生しないよう配慮を行っている。複数の会議開催日程が重なり、勤務時間を超えて会議が延長される状況もあり、次年度の課題である。 ・起案電子化等により、紙媒体からオンラインへの切り替え等は進んだが、持続可能な業務設計とデータ管理など、一層の効率化が必要である。特に業務が円滑に再現できないような抽象的な情報共有と引継ぎ内容が多く、業務効率化やブラッシュアップが難しい傾向がある。 ・副校長を中心に業務分担を適正化することで、特定の教職員に負担がかかりすぎないようにした。事務処理量の軽減や報告事項の精選を通して校務の効率化を図り、生徒と接する時間を確保して行く。 ・週休日・休日の振替は確実に行われているが、一部在校時間の短縮が進まない教員がいる。
<p>③教職員の資質・能力を向上させ、進学指導重点校としての教育活動を充実させる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・若手教員にはOJTシートを作成させることで、授業だけでなく、校務全体の指導力向上を図った。 ・若手教員育成道場により、研究授業を行った。複数の教科での授業参観、指導教諭の授業公開、研究会の研修会を通じて、教員としての資質能力の向上が図られている。教科の境界を越えて参観及び意見交換ができる枠組みが全体で共有できるようにする必要がある。 ・指導教諭の模範授業や公開授業を実施し、学校外や他校種からも多くの教員が参観し、都立学校全体の授業力向上に寄与した。 ・「体罰根絶」に向けて、事故例の周知及び校内研修での繰り返しの注意喚起を年間通して行うことができた。 ・学期始めや終わりに、服務事故防止研修を行った。情報セキュリティに関するアンケートや研修、注意喚起を定期的に行うことで、セキュリティ対策が十分に行われていることを確認した。
<p>④経営企画室の経営参画を推進し、業務を円滑に遂行する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・経営企画室ガイドラインに基づいた経営参画を企画室事務処理方針で示し取り組んでいる。 ・経営企画室の分掌業務については、おおむね遅滞なく処理した。 ・諸会議で経営企画室の情報を発信し、また、個々の対応については担当者が教員との連絡調整を行い、確実な業務執行に努めた。 ・施設設備の不具合については、速やかにセンター等担当部署と調整し、対応した。 ・校長の予算編成指針に基づき予算編成を行い、四半期執行計画に基づき計画的に執行した。自律経営推進予算の編成においては、固定費用の割合が高く、今後、経年劣化が予想される機器等の更新に充てる予算の捻出が難しい。進学指導重点校に必要な経費を確保しつつ、機器の更新等に対応できるよう、行事計画の見直し、真に必要な経費の精査でメリハリのある予算編成を行う必要がある。

(8) 国際理解教育

今年度の取組目標	自己評価
①グローバルリーダーを育成する取組を実施する。	<ul style="list-style-type: none"> ・次世代リーダー育成道場について周知し、希望者の指導を行った。 ・外部機関の留学を希望する生徒が複数見られるようになった。世界史や地理、英語の授業を通じてグローバルリーダーとして必要な知識と教養、視座を身に付けさせた。
②国際社会で活躍するのに必要なアイデンティティの育成や日本文化の理解を推進する。	<ul style="list-style-type: none"> ・歌舞伎教室を実施し、日本の伝統芸能に触れる機会を得た。 ・異文化交流は実施できなかったが、進路講演会等で、海外を舞台に活躍する本校卒業生たちの話を聴くことができた。

2 重点目標への取り組みと自己評価

重点目標	具体的な数値目標と結果	評価
1 広報活動を充実させ、募集対策に努める。	①夏季見学会来場者数 1043名 (昨年 896名) ②学校説明会来場者数 750名 (昨年 851名) ③入試説明会来場者数 352名 (昨年 282名) ④推薦に基づく入学者選抜の応募倍率 3.32倍 (昨年3.73倍) ⑤学力に基づく入学者選抜の応募倍率 1.47倍 (昨年1.68倍)	△ △ △ △ △
2 進学重点校としての進学実績を向上させる。	①東京大学現役合格者数 8名 (昨年 11名) ②難関国公立大学現役合格者数 (東京・東京工業・一橋・京都・国公立医学部医学科) 51名 (昨年 50名) ③東京・京都以外の旧帝大現役合格者数 (北海道・東北・名古屋・大阪・九州) 12名 (昨年 16名) ④国公立大学(四年制)現役合格者数 149名 (昨年 135名) ⑤難関私立大学現役合格者数(早稲田・慶應・上智・東京理科) 217名 (昨年 308名) ⑥共通テスト文系6教科7科目・理系5教科7科目受験者 268名 (昨年 247名) ⑦共通テスト文系6教科7科目得点上回り指数 1.31 (昨年 1.30) ⑧共通テスト理系5教科7科目得点上回り指数 1.26 (昨年 1.27)	△ ◎ △ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎
3 学力向上のため、長期休業日中の講習を充実させる。	② 長期休業中の講習講座数 153講座 (昨年138講座) ① 長期休業日の講習受講者数(延べ) 9870人 (昨年 9615人)	△ ○
4 学力向上のため、家庭学習時間を増加させる。	①家庭学習時間 1年(春季) 1.65時間 (昨年1.41時間) 2年(春季) 1.78時間 (昨年1.64時間) 3年(春季) 2.77時間 (昨年2.53時間)	○ △ △
5 授業改善に努め、生徒の授業満足度を向上させる。	①学校評価項目「授業その他、本校の学習や教育のあり方全般に満足しています。」の「A:そう思う」、「B:ややそう思う」の合計ポイント 83.9% (昨年 87.1%)	△
6 肌理の細かな進路指導を実施し、進路指導満足	①学校評価項目「本校の進路指導は、進路実現の参考になり役立っていると思いますか。」の「A:そう思う」、「B:ややそう思う」の合計ポイント	

度を向上させる。	80.7% (昨年 84.7%)	△
7 特別活動・部活動を充実させ、生徒の学校満足度を向上させる。	①学校評価項目「学校生活に充実感を感じていますか。」の「A:そう思う」、「B:ややそう思う」の合計ポイント 91.2% (昨年 93.3%)	◎

◎ 達成 ○ ほぼ達成 △ 未達成

II 次年度以降の課題と対応策

(1) 教育活動の質を向上させる

授業への満足度は昨年度並みだが、家庭学習時間は依然として目標である（学年+1）時間に到達していない。また、教育活動におけるDX化に対する期待が、内外から非常に高く、これに応える体制の確立が必要である。学習時間については、これまでも、課す課題の量や時期の調整等、効果的な方法についての検討や、若手教員育成のための授業改善研修を行うなどしてきたが、学校行事や部活動との両立の面で、十分に時間が確保できていないようである。また、グループ学習や課題研究、それに伴う発表の準備に労力と時間が必要となっている状況についても検証していく必要がある。感染症対策で見直しを進めてきた部分も含め、何事も今まで通りではなく、社会のニーズや時代の状況に即して、部活動や学校行事などの特別活動の在り方について、例えば時期や形態、活動時間等、検討をすることが重要である。効率よく学習を進める手立ての工夫、スマートフォンに費やす時間をどう学習に振り向けるかがなど、各教科の更なる創意工夫と、学習時間の確保を含めた時間管理意識についての指導を継続的に行っていく。ICTについては、ハード面での整備が進む中、ソフト面においても一層の充実が求められる。来年度は1・2年生が一人一台端末を持つようになり、様々な場面の活用が求められる。

次年度から、三学期制とすることとなった。定期考査の回数や学校行事の時期については従前どおりとする中で、今年度から取り入れた到達度テストの一層の活用により、早期に学習習慣の定着を図る。また、成績の通知を毎学期末とすることで、長期休業に入る前に学習状況をきちんと振り返らせ、休業日を有効に活用できる指導も行っていく必要がある。そしてこれまでの改革の成果を検証し、次のステップに向けての一步を踏み出していく必要がある。

(2) 生徒の高い進路希望を実現する

今年度も長期休業中や放課後、大学入学共通テスト後の時期等、講習や添削指導などのきめ細かい指導を行い、高い難関国公立大学進学実績を維持できた。また、学校経営計画の数値目標を現役生徒の数値にしたことで、教員の目標も明確となり、進路決定率が高くなっていることから、今まで以上に現役での希望進路の実現と、高い進路希望を維持させる進路指導の両立が必要である。生徒の高い志を最後まで維持させること、途中で諦めさせないこと、過年度比較や他校比較等のデータ分析が可能になった模擬試験の活用、模試分析や志望校・出願検討への参加者の拡大、長期休業中の講習における内容や設定の検討も継続する。大学入学共通テストの傾向に合わせて、情報処理や読解力を培うとともに、新しい入試への対応として記述やコミュニケーションなど表現力の向上にも対応できるよう授業改善を進める。

進路指導の満足度がやや低下している。進路指導について、生徒本人はもちろん、保護者の意向についても適切に把握し、進めていくことが重要である。そのためにも三者（保護者）面談を活用できるようにしていく。今年度も希望制で実施したが、保護者の方からは、中学校時代と同様の実施を求める声もある。時期の設定や希望の取り方を工夫するなどハードルを低くし、保護者の意向をしっかりと把握しながら、より高い目標を目指すような指導を行っていく。

本校は、進学指導重点校として、生徒の高い進路希望を実現させるべく、質の高い教育活動を行ってきた。今後もより高い目標（ゴール）を目指し、全教職員一丸となって学校改革を進め、生徒の進路希望実現と、生徒・保護者・地域の期待に応えられる学校づくりを更に推進する。